［地域総研紀要　16巻１号, P39－52（2018）（一般論文）］

五島列島の潜伏キリシタン墓の研究４*
（旧木の口墓所調査）

野村俊之***、加藤久雄**

Study of the tomb of hidden Christians in the Goto Islands (IV)

１．はじめに

本調査は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2017Ｂ２の補助を得て行われたものである。

本編は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所が主体となって、平成24年２月から平成29年12月にかけて行った五島市平蔵町字中木の口に所在する「旧木の口墓所」調査の第４報である。今回は主に第２次調査及び第３次調査に実施した個別遺構実測調査の成果について触れる。

位置と環境は、『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所）』(2014　加藤・野村他)、第２次調査まで経緯と調査内容は上掲書及び『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査その２）』(2015　野村・加藤・白濱・藤本)・『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究３（旧木の口墓所・遺物編)』(2016　野村・加藤・白濱）を参照されたい。

２．第３次調査の概要

第３次調査は、平成29年９月13～20日に福江島内の潜伏キリシタン関連墓地巡見と並行して、個別遺構実測調査を実施した。選択した遺構は、第１次調査では代表的な遺構７基を、第２次調査では墓所中段の遺構を中心に実測をおこなった。このため第３次調査では主に墓域下段の各遺構を対象とした。なお第１次調査の実測成果は『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査)』(2014　加藤・野村）上に公表済みである。

またその成果を受けて、12月15日から16日にかけて補完調査として遺構を構成する石材、特に小円礫の状況確認と新たに見出された遺構の写真撮影、遺構法量の数理考古学的研究を目的とする個別数値の再計測をこれも福江島内関連墓所の巡見と並行しておこなった。

第３次調査には野村、加藤の他本学経済政策学科１年で五島出身の泉涼也が参加した他、墓所の管理者である木口榮氏とそのご子息木口貴行氏、松本作雄氏（五島文化協会)、山下博美氏（五島キリシタン研究会）のご協力を得た。記して感謝申し上げる。

なお実測図は加藤久雄指示の下、泉涼也の補助により野村俊之が作成したほか、第２次調査では白濱聖子（本研究所客員研究員・現：大野城市教育委員会)・松薗奈穂（現：福岡市埋蔵文化財センター)・藤本新之助（元本学学生）が作成した。

トレース図の作成は堀章子が、トレース図の編集は天本雅（石造遺産調査会)がおこなった。（敬称略）

３．各遺構の観察

実測時において認定した角礫・円礫の別、各墓を構成する石材の大小、墓所の基盤土に含まれる砂～泥岩質角礫を除いた石材の種別石材の種類、礫の配置、樹木の状況や流失・埋没等の構成要素を記す。特に初回報告（2014　加藤・野村他）では石英斑岩としたものは今回はより大きな分類として五島花崗岩類と呼称する。また文中では標高の高い方を上位とし、それに向かって右側、左側という表現を用いた。図版では右側が上位となる。又、円礫にはアミカケを施した。

№18（図版１）

主軸長115㎝・幅83㎝を測る。大形の角礫で３方を囲む、内１石は多孔質の五島花崗岩類を使用する。内部には泥岩～砂岩質の角礫を重複して充填し、内１石は流紋岩と思われる。中心部には砂岩質の長円礫１が倒れており、本来はこれが、立石であった可能性が高い。

№19（図版１）

主軸長127㎝・幅103㎝を測る。角礫並べて四方を囲み、内東西の２石は五島花崗岩類を使用する。内部には小礫を一重に敷き並べており、１石は小円礫を使用している。その隙間に灌木が根を

* Received January 15, 2018
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　経済政策学科、Department of Economic Policy, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan
*** 石造遺産調査会、長崎ウエスレヤン大学　地域総合研究所客員研究員

張っている。

№20（図版１）

主軸長130cm・幅119cmを測る。大形の角礫２石を上位・右側に置き、他はやや散発的に中形の角礫で囲む、内２石は五島花崗岩類を使用する。内部には重複して小角礫を充填するほか、中央部にはやや大振りな五島花崗岩類角礫を据える。下位には灌木が根を張っている。

№21（図版１）

主軸長96cm・幅78cmを測る。上位を除き３方に大形角礫を据えて、間隙と上位には小～中形の角礫を以て囲う。内部には散発的に角礫を充填し、内部下位では小円礫の集中を見る。

№22（図版２）

主軸長133cm・幅77cmを測る長方形として実測を行ったが上位２石はやや遊離しており、或いは主軸長74cmの方形を呈する墓である可能性がある。下位と左側に大形の角礫を据え、他方は中形の角礫で囲う。内部は小角礫と２石の小円礫で一重に充填する。

№23（図版２）

主軸100cm・幅70cmを測るが、上位の２石は転石の可能性があり、主軸81cmの方形となる可能性がある。凝灰岩および福江島ではほとんど産出のない安山岩各１石を含む角礫で囲い内部に角礫を充填する。

№24（図版２）

主軸長112cm・幅105cmを測る。大形の角礫で囲い、内部を二重の角礫で充填する。外周の角礫は一部粗割されており、方形を意識した作りである。下位外周部に灌木が生える。

№26（図版２）

主軸長128cm・幅100cmを測る。角礫を敷き並べた上に角礫を載せた状態である。五島花崗岩類３石と凝灰岩１石を含む。

№28（図版３）

主軸長95cm・幅81cmの方形として実測を行ったが、上位の小円礫２石と小角礫２石は流れ込みの可能性がある。これを除外すると、主軸長87cmの小形方形を呈する。五島花崗岩類１石を含むやや大振りな角礫で囲み、内部に同じく五島花崗岩類１石を含む角礫を充填する。下位がやや低くなることから本来は二重以上の積石であった可能性がある。上位は埋没傾向にある。

№29（図版３）

主軸長118cm・幅62cmを測る長方形である。右側を除き大振りな角礫で囲っており、埋没又は失われている可能性がある。内部は小円礫１石を含む中形の角礫で充填する、一部二重になる。

№30（図版３）

主軸長139cm・幅90cmを測るが、下位は灌木の根によって撹乱を受けており、最下位の１石は転石の可能性がある。これを除けば主軸長119cmとなる。五島花崗岩類２石を含む大ぶりな角礫で囲み、内部を五島花崗岩類１石を含む角礫で充填する。

№31（図版３）

主軸長120cm・幅83cmを測る。角礫凝灰岩１石、五島花崗岩類３石を含む大形礫で囲み、内部は小角礫で充填する。中央に泥岩の細長い角礫が横たわっており、本来はこれが立石となる可能性がある。

№32（図版４）

主軸長144cm・幅130cmを測るが、上位の１石は転石の可能性がある。それを除外すると主軸長130cmの方形となる。円礫である五島花崗岩類１石を含む大形角礫を長方形に囲み、小円礫１石を含む中～小形角礫をやや重複して敷き並べている。

№36（図版４）

主軸長72cm・幅67cmを測る小形方形である。五島花崗岩類３石を含む４隅及び上位中央に大形角礫を配置し、角礫と多数の小円礫で充填する。

ｉ（図版４）

主軸長67cm・幅48cmを測る。１・２次調査では礫集積の可能性ありとして遺構番号を振らなかったが、上位が埋没又は流失した墓として新たに認定した。№36に接する形で設置されている。下位及び左側に五島花崗岩類１石を含む大形の角礫を配し、内部は埋没している。

№42（図版４）

主軸長96cm・幅90cmを測る。五島花崗岩類２石を含む角礫と小円礫を重複して敷き並べている。

№49（図版４）

現状では主軸長77cm・幅107cmを測る土端天端に位置する一部流失したものである。元の形状は不明であるが、大形角礫で四方を囲み角礫および小円礫を充填するものと考えられる。

№50（図版５）

主軸長105cm・幅89cmを測る。角礫と中形の円礫３石を重複して敷き並べたものである。上位右角には灌木がありやや形状が乱れる。

№53（図版５）

実測図は主軸長91cm・幅92cmを測るが、上位右側の５石は別遺構、右側の１石は転石の可能性がある。これを除くと主軸長61cm・幅63cmの小形方

形を呈するものとなる。現状では五島花崗岩類１石を含む角礫をややまばらに敷き詰めた物に、一辺を粗割した扁平な１石を乗せた形状を示すが、この扁平な１石は一部が粗割されていることから墓石のように上位に立石を持つものの可能性が考えうる。

№54（図版５）

現状で主軸長82cm・幅110cmを測るものとして実測を行ったが、左側の２石は別遺構の抜き跡と考えられ、これにより幅は89cmとなる。両脇に角礫を並べ、中心は埋没したか、石の充填を行わないものである。

№55（図版５）

主軸長78cm・幅87cmを測る。五島花崗岩類１石を含む大形角礫と比較的扁平な礫、五島花崗岩類２石を含む小角礫を比較的密に敷き並べている。

№56（図版６）

主軸長98cm・幅73cmを測る。上位及び下位を角礫で囲み、内部に小円礫２を含む小～中形礫を比較的疎らに敷く。

№57（図版６）

主軸長91cm・幅88cmを測る。灌木の根が張っておりかなり乱れてはいるが、五島花崗岩類２石を含む角礫を二重に敷き詰めている。

№58（図版６）

主軸長116cm・幅76cmを測る。大形礫を下位に置き角礫で囲む。主軸方位は近接する他の遺構とほぼ揃っているが、あるいは大形礫が下位の配置となるかもしれない。内部は小円礫２石を含む小礫で充填する。

№59（図版６）

主軸長99cm・幅98cmを測る。石英斑岩（五島花崗岩類）１石を含む角礫で囲み、内部には二重に角礫を充填し、さらにその隙間に小円礫を充填する。

№60（図版６）

主軸長90cm・幅78cmを測る。段落ち天端に位置しており、上位は倒木が迫っている。玄武岩・五島花崗岩類各１石を含む角礫を二重に敷き詰めており、小円礫２石が混在する。

№62（図版６）

主軸長100cm・幅115cmを測る。両側面に大形角礫を並べ内部に角礫を中心に二重に充填する。上部に長円礫が横たわっており、本来は立石だった可能性がある。右側内部に灌木が根を張っており、やや乱れる。

№66（図版７）

主軸長90cm・幅46cmを測る。五島花崗岩類１石を含む円礫及び角礫が散在しており、一部は埋没する。

№67（図版７）

現況の主軸長73cm・幅73cmを測る。下位は埋没しており、全形は不明瞭である。上位に角礫を並べ散発的に小円礫３石を含む角礫を敷く。上位右に長円礫が横たわっており、あるいはこれが立石だったのかもしれない。

№71（１）（図版７）

主軸長95cm・幅85cmを測る。1次調査時点では流失した痕跡と考えた。左右側に角礫を配し、中央部には五島花崗岩類１石を含む礫が半ば埋没し散在している。地下構造の陥没に伴うものか。

№72（ｈ）（図版７）

主軸長71cm・幅47cmを測る。比較的大ぶりな角礫で囲み、中央には角礫１石を配置する。

４．所見

№.	位置	分類	使用石材
18	中段	Ⅰ'－Ａ－２	五島花崗岩類
19	中段	Ⅰ－Ｂ－１	五島花崗岩類
20	中段	Ⅰ'－Ａ－２	五島花崗岩類
21	中段	Ⅰ'－Ｂ－１	
22	中段	Ⅰ－Ｂ－１	
23	中段	Ⅰ－Ａ－１	凝灰岩・安山岩
24	中段	Ⅰ－Ａ－２	
26	中段	Ⅱ－Ａ－２	凝灰岩・五島花崗岩類
28	中段	Ⅰ－Ａ－２	五島花崗岩類
29	中段	Ⅰ'－Ｂ－２	
30	中段	Ⅰ－Ａ－１	五島花崗岩類
31	中段	Ⅰ－Ａ－１－ａ	角礫凝灰岩・五島花崗岩類
32	中段	Ⅰ－Ｂ－２	
36	中段	Ⅲ－Ｂ－２	
ｉ	中段	Ⅰ'－Ｄ	五島花崗岩類
42	中段	Ⅱ－Ｂ－２	五島花崗岩類
49	下段	Ⅰ－Ｂ－２	
50	下段	Ⅱ－Ｂ－２	
53	下段	Ⅱ－Ｂ－２－ａ	五島花崗岩類
54	下段	Ⅰ'－Ｄ	
55	下段	Ⅱ－Ａ－１	五島花崗岩類
56	下段	Ⅰ'－Ｂ－１	
57	下段	Ⅱ－Ａ－２	五島花崗岩類
58	下段	Ⅰ－Ｂ－１	
59	下段	Ⅰ－Ｂ－２	
60	下段	Ⅱ－Ａ－２	五島花崗岩類・玄武岩
62	下段	Ⅰ'－Ａ－２	
66	下段	Ⅱ？－Ａ－１	五島花崗岩類
67	下段	Ⅰ'－Ｂ－１－ａ	
71	下段	Ⅰ'－Ａ－１	五島花崗岩類
72	下段	Ⅰ－Ａ－１	

第１回報告（2014　加藤・野村他）で掲載した７基及び今回掲載した各遺構実測図を俯瞰してみると、下段は中段に対して比較的残りが悪い傾向が多いことに気づく。これは地形的制約の影響があるかとも思えるが、築造時期からの経年変化によるものと考えられる。これは下段における採取遺物の半数が第１期（近世）であったとの成果からも首肯される（2017　加藤・野村）。平断面形態からいくつかの傾向に分類できることも徐々に明らかになってきた。

１つは角礫を中心とした大形礫で方形ないしは長方形に囲うものである。仮にこれをⅠ類とする。一辺乃至二辺が欠落しているものもこれに含めたい。ここではこれをⅠ’類とする。

明確な囲みを持たず石を敷く物がある。これを仮にⅡ類とする。

数は少ないが４隅にややおおぶりな礫を置くものがある、仮にⅢ類としておく。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類とも角礫で充填するもの、角礫を中心としながら小円礫を併用するもの、小円礫中心のものがある。それぞれＡ類・Ｂ類・Ｃ類と仮称する。今回はＣ類の実測を行っていないが、追加調査時に№74として認識をしており、図版に写真を掲載している。この中で礫を平坦に充填・敷き詰めるもの、重複して組み上げるものに大別でき、これらをそれぞれ１類・２類とする。

さらに、一部では中央に立石がある、あるいはあったとみなせるものがあり、ａ類と仮称する。

これらをまとめると前掲の表になる。

このような分類は大分県臼杵市所在の下藤キリシタン墓地[※1]で神田高士が試みており（2016　神田）、当墓地の石組墓の大部分は神田分類の２類にあたるが本墓所の場合は石蓋は想定していない。この中で筆者は小円礫の存在に着目しており、平戸市のウシワキ遺跡（2009　北浜・塩塚）でも同様に小円礫が検出されている。また平戸市の実施した調査では「丸石」とキリシタン遺跡の関連について言及している（1988　萩原）。今回は写真掲載にとどまったが、№74は四隅に角礫を置き小円礫のみを充填するものであり、他の発掘事例からみても逆に古式なあり方として注目される。

平戸や北松地区では石組墓が分布しており、石組墓それ自体が即キリシタン墓であるとはいい難い状況にあるが（2015　野村・加藤）（2017　野村・加藤）、布教期からおそらくは禁教期の初期まで九州の東西で小円礫の存在がキリシタン墓に於いて採用されていることは注目すべきである。

今回実測した墓構成の全体の傾向として、礫で墓の外形を区画するⅠ類は中・下段ともにまんべんなく分布するのに対して、敷石で構成されるⅡ類は下段にやや集中する傾向がある。また同様にⅠ’類も下段でやや多い傾向がある。これは前述の通り下段遺構の残存状況が悪いことも一因であろうが、全体としてはより古式の造りである可能性があろう。時系列的にはⅡ類→Ⅰ’類→Ⅰ類への変遷が想定されうる。移住当初の不安定な生活基盤から時を経るにつれて安定化へ向かうなかで、開墾時に土中から採取した限られた角礫のみを使用した造墓から、他所からの石材搬入の余裕ができたことによる石材の安定供給が墓の構成をより安定的・定型的に作ることが可能になった現れであろうか。

しかしながら、少なくとも当該墓地基盤土からは見いだせない五島花崗岩類が比較的まんべんなくみられることは前述の想定を裏付け得ない。地元石材と他所から運ばれた五島花崗岩類、玄武岩・安山岩・凝灰岩等の石材使用の選択性は被葬者の出自を表すものの可能性も想定され、肉眼観察では限界があるものの今後の調査方針として注目したい。

一方、二段構成を示す２類は中・下段ともにみられる。これは礫を原位置から動かすような強い力が働かなかったことを示すものと考えてよかろう。とすれば、下段が構成礫の埋没・流失を受けているとしても、改葬行為を除き少なくとも人為的な破壊行為は受けていないことが理解できる。これにより前述した下段においてⅡ類が多く観察されることは、仮定したⅡからⅠ類への変遷を裏付けるものとなりうる。もちろん被葬者の階層性の反映と考えることもできるであろうが、移住民で構成された木の口集落の中で大きな階層差が生じていたとは考えにくく、あるとすれば子供・大人の違いか、村中における指導者層の突出した墓構造の出現という現象であり、前者の場合は法量に、後者の場合は数少ない「立派な墓」という現象に立ち現れてくるであろう。またこのような場合を想定する際には、墓の墓域内での立地も視野に入れていかなければならない。

同様に禁教停止以降の信仰の違いから、墓形態の変化もみられるであろうが、№１の十字架浮彫の板状墓石、墓の蓋石であるかどうかは明確ではないが浮彫・墓碑銘のない小形板状のもの、明治・大正期の方柱墓石を持つ２基以外は明確な形態差はない。むしろ宗教性や時代性は方形であるか長

方形であるかといった平面形態にあらわれてくるものと考えられる。

また、立石を持つであろう墓は中段に１基、下段に２基あり、これは年代観を示すものか信仰や、先に述べた階層性を表すものであるかどうかは、他墓所の事例と合わせて考えたい。

何れにせよ悉皆実測とそれによる詳細観察、遺物の散布状況を数理的に分析した成果（2017　加藤・野村）を結合させて検討を加えなければならない。

５．おわりに

１～３次調査では38基の遺構実測を実施した。現在確認できた墓は76基であるので半数の実測調査が終了したこととなる。しかし、降雨による洗い出しや、実測に伴うさらなる詳細観察で多少の増加も見込まれる。また今回の調査では取り上げを行っていないが『五島列島の潜伏キリシタン墓研究３（旧木の口墓所・遺物編）で取り扱った以外の遺物も散見されている。これらについては今後の調査研究課題としたい。

また、今回は実測対象としたものに限り分類を行っており、別稿『潜伏キリシタン墓の数理分析の視野―旧木の口墓所採取遺物組成の分析―』で取り扱った数値は表面観察の成果をもとに行っているため、詳細実測によってさらに精密な分析が可能となってくる。

これらの課題は、全遺構対象の実測調査実施を待って万全を期したい。それらを元に、詳細な形式分類・編年から配置や造墓の原理、墓前祭祀の復元をおこなうこととなる。

小円礫の問題や墓所のあり方、潜伏キリシタン墓・カクレキリシタン墓の認定は、類似する五島列島内をはじめ西北九州の墓所、また他の仏教や神道式の墓のあり方を調査することによってより明確になっていくであろう。

これら課題は山積しているが、本稿では現在までの成果を報告した。

註

※１　臼杵市野津町大字原字山仲所在の墓地で、罪票付十字架が刻まれた石蓋や、石造INRI碑が見出されており、一定の区画は長方形の石組墓で構成された16世紀末～17世紀初頭のキリシタン墓地とされている。国指定史跡。

参考文献

1988　萩原博文「平戸市内キリシタン遺跡詳細分布調査報告書　平戸市の文化財24」平戸市教育委員会

2009　北島聖美・塩塚浩一編『キリシタン寺院跡（上中津良教会跡）『焼山』『ウシワキ遺跡』「市内遺跡確認調査報告書Ⅷ」平戸市の文化財62」平戸市教育委員会

2014　加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之助『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2014　野村俊之・加藤久雄・白濱聖子・藤本新之助『潜伏キリシタン墓の造墓原理』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2014　野村俊之･加藤久雄『潜伏キリシタン墓･木の口墓所の概要』「2014年次日本島嶼学会要旨集」（P96－110）日本島嶼学会

2015　加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之助『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究２（旧木の口墓所調査）』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要13巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2015　加藤久雄・野村俊之『五島列島の潜伏キリシタン墓に関する分布の基礎的研究』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要13巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2015　野村俊之・加藤久雄『石組墓の成立と変化についての予察（福江島木の口墓所の潜伏キリシタン墓をめぐって』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要13巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2016　神田高士他『下藤地区キリシタン墓地』臼杵市教育委員会

2017　野村俊之・加藤久雄『生月島の墓制―石組墓を中心に―』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要15巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2017　加藤久雄・野村俊之『潜伏キリシタン墓の数理分析の視野―旧木の口墓所採取遺物組成の分析―』「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要15巻１号」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

2017　神田高士『キリシタン墓碑の様相からみたキリシタン統制』「キリシタンは石で何を造ったか―大分石造文化研究会シンポジウム資料」大分石造文化研究会

No.74

No.72（ｈ）

No.76

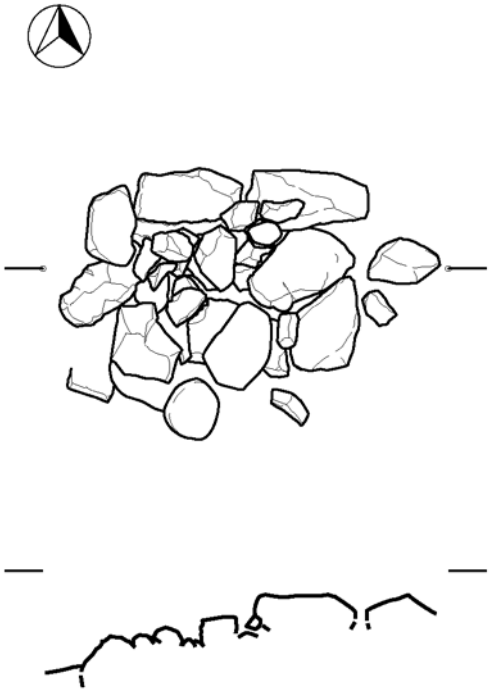
No.75

No.73（ｈ）

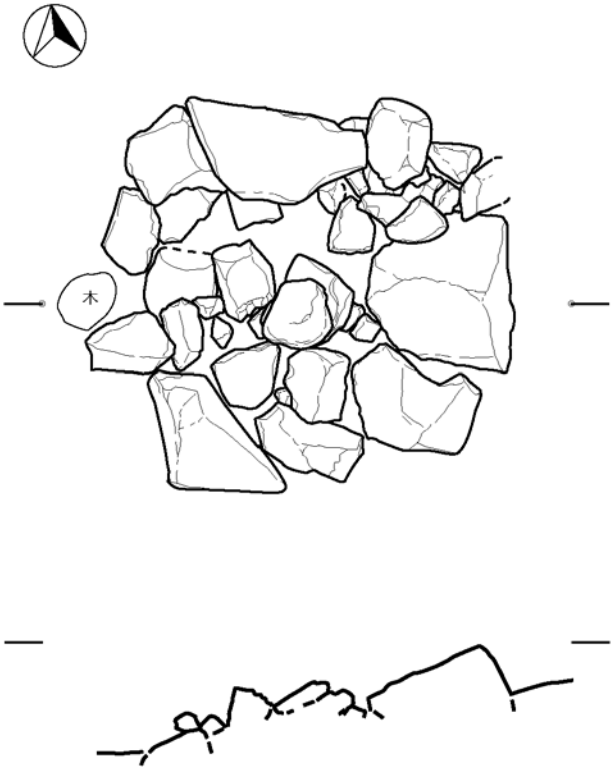
写真図版

図版１

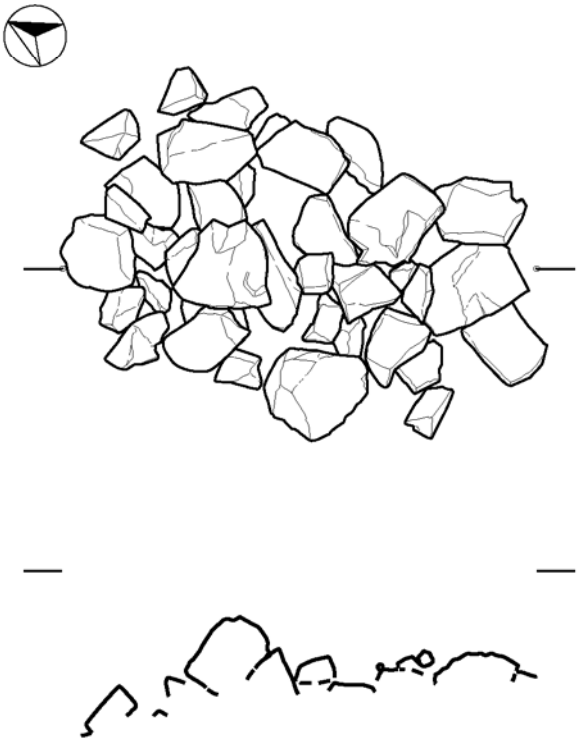
No.24.0



No.23



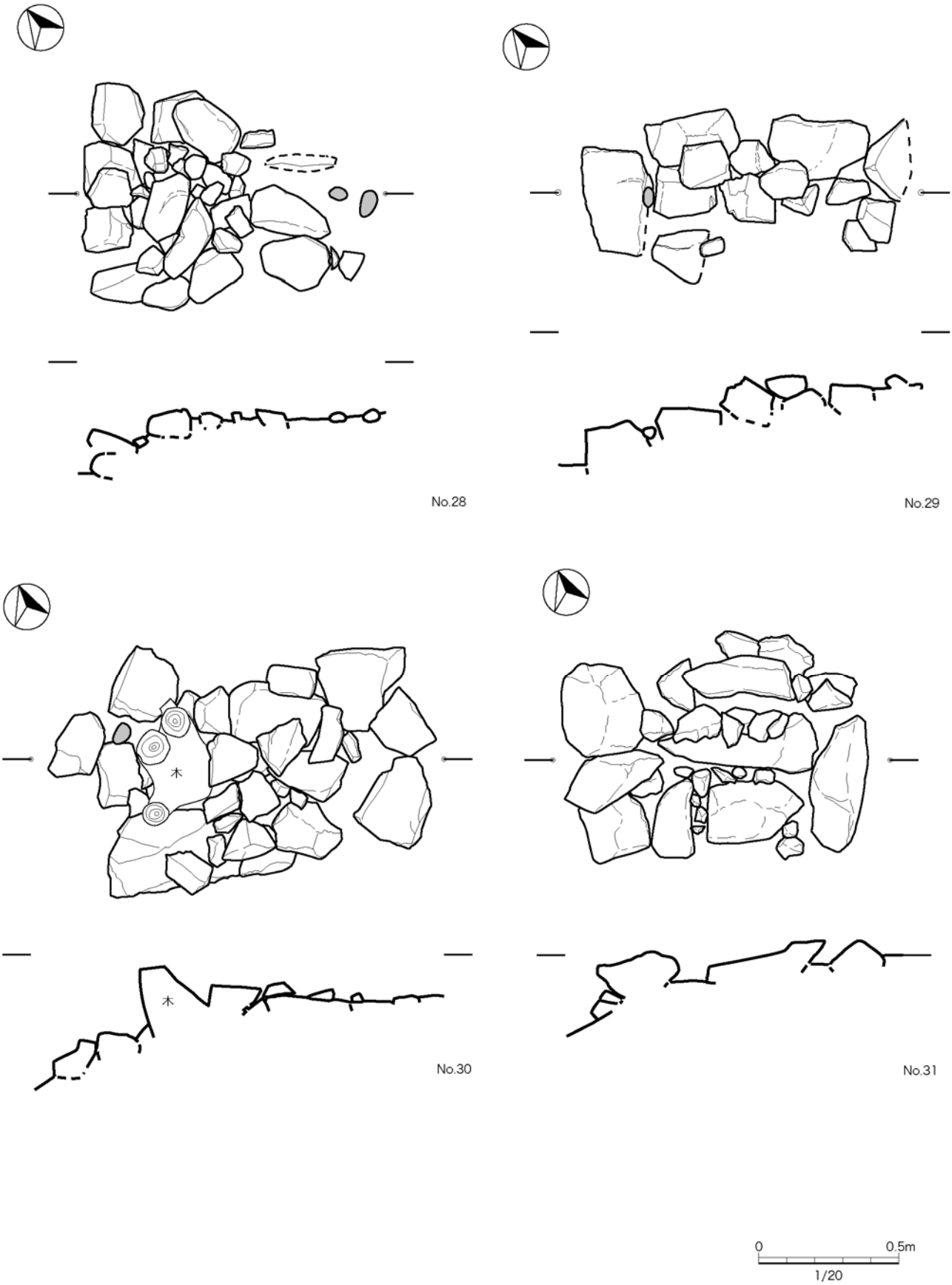
No.24-1



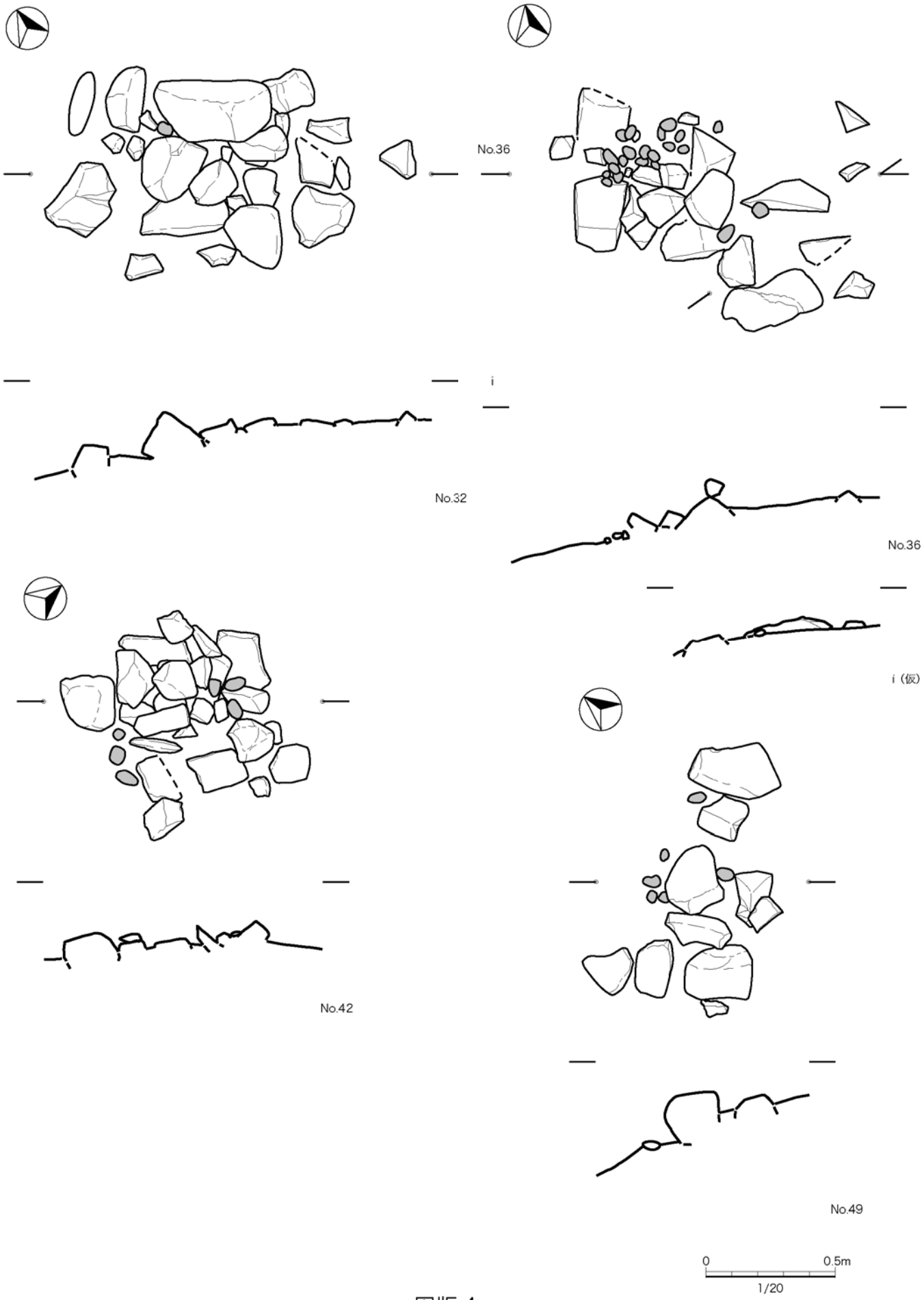
No.26

0　0.5m
1/20

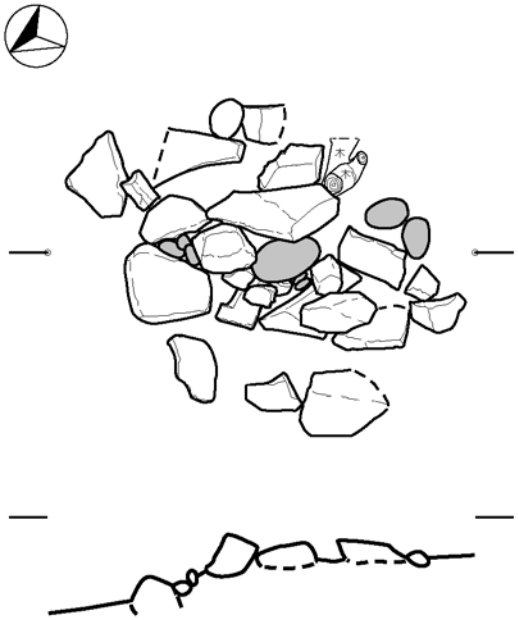
図版２



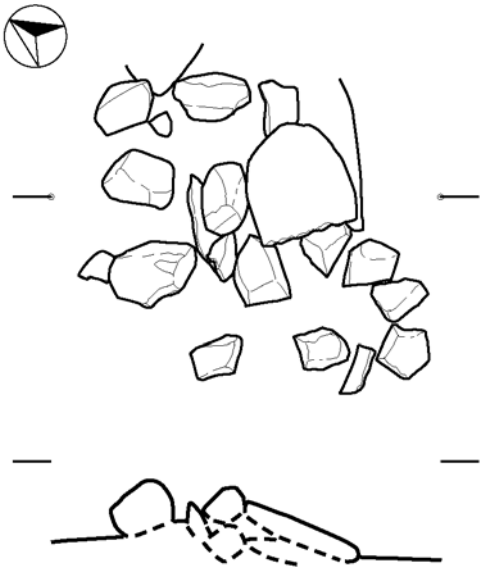
図版３



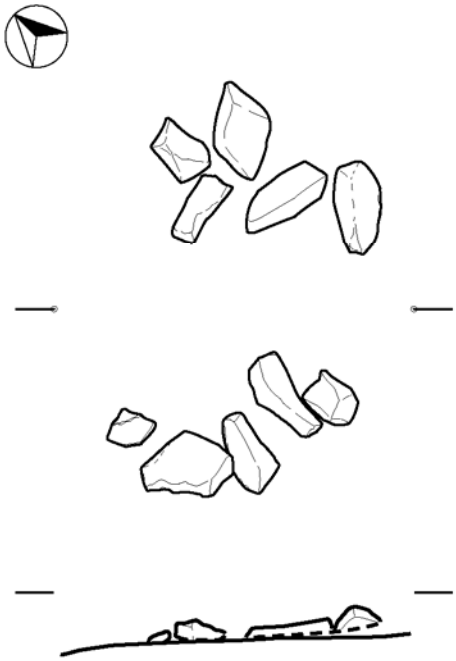
図版４



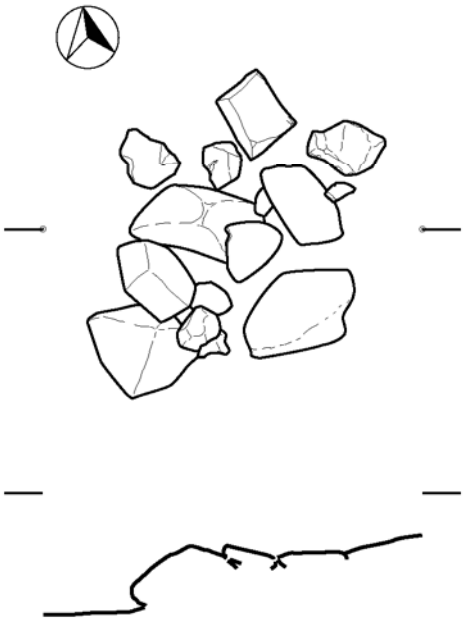
No.50



No.53



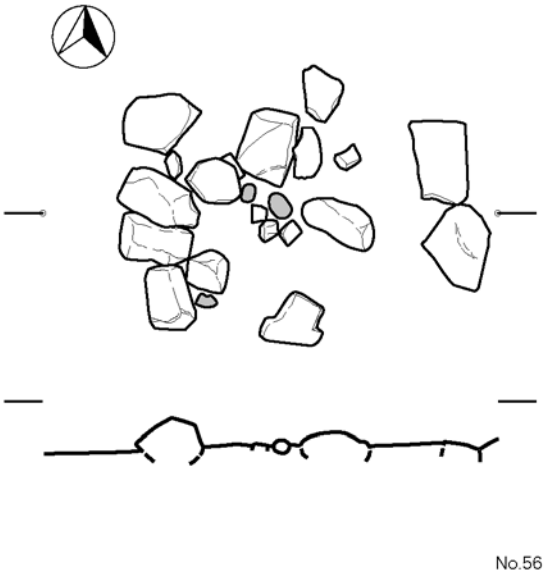
No.54

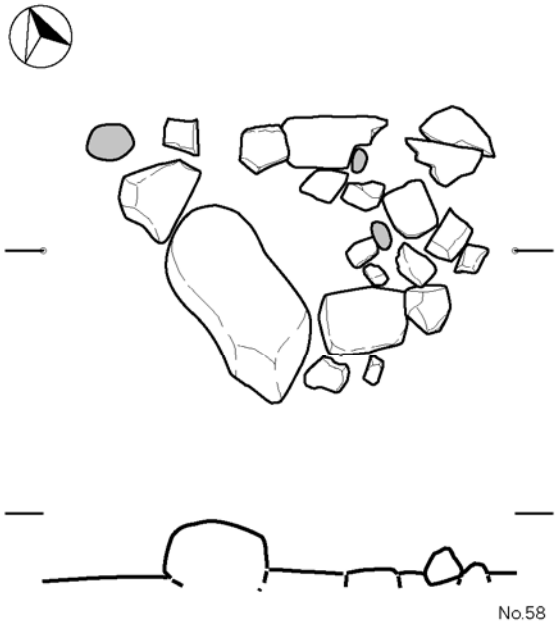


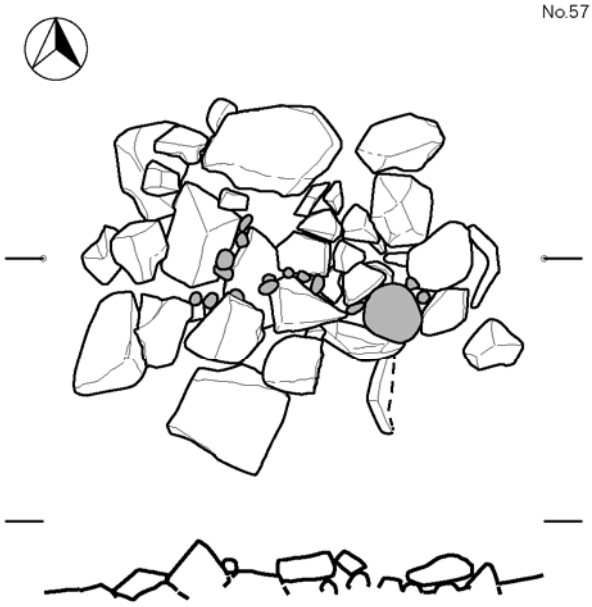
No.55

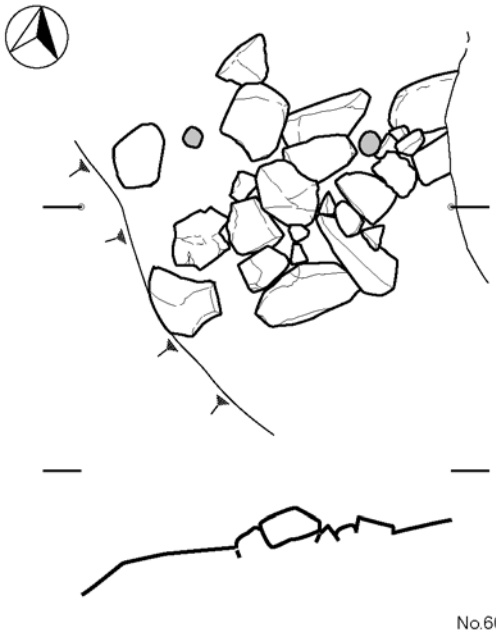
0 0.5m
1/20

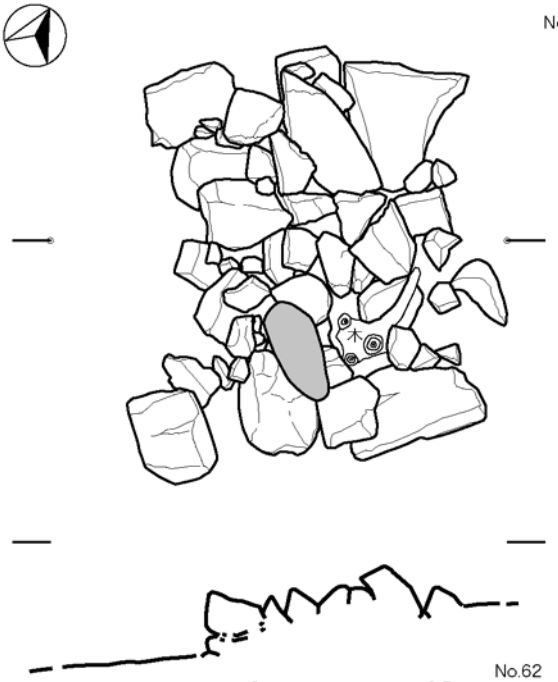
図版５



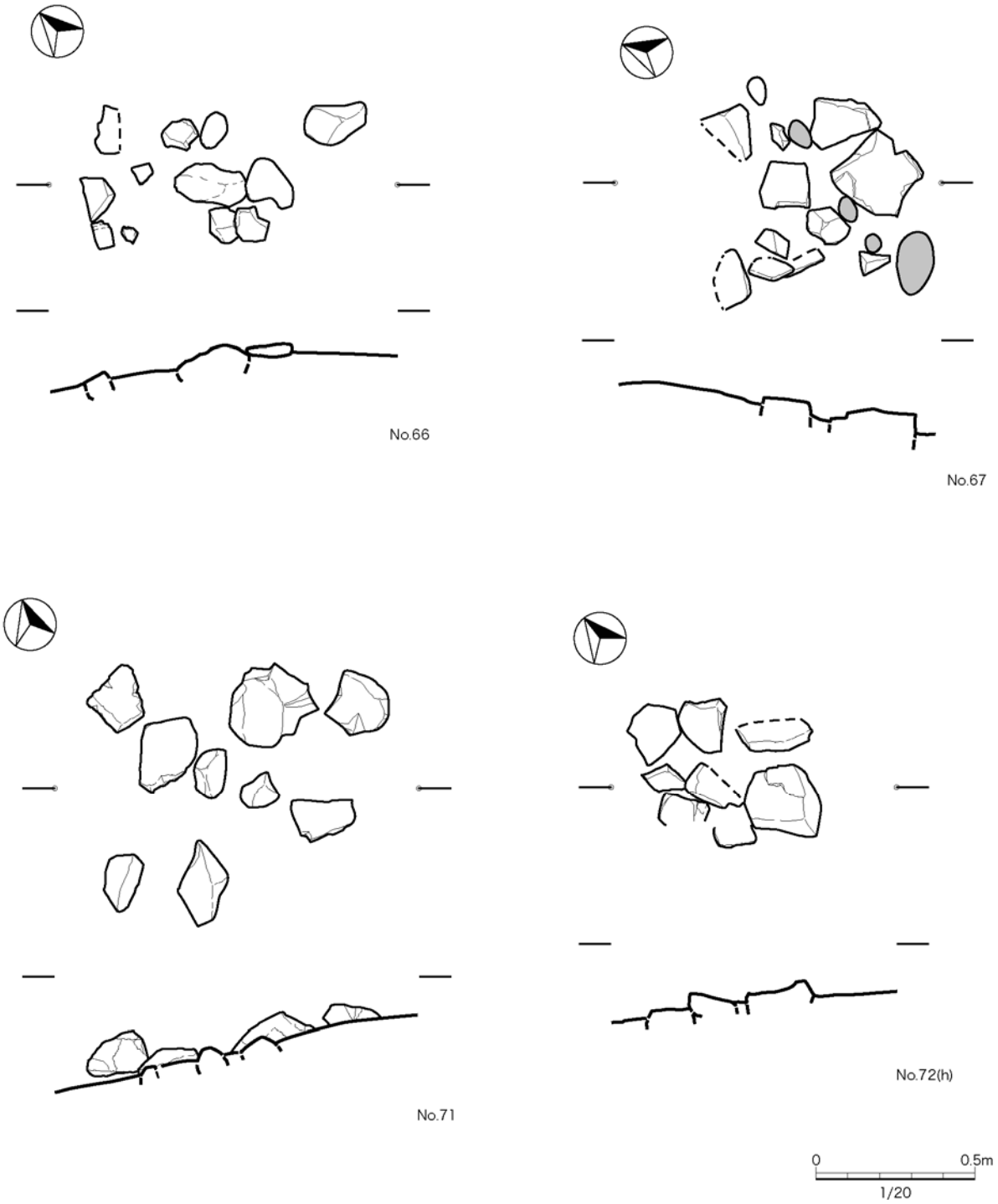








図版６



図版７